

結婚と其時期

湘 南

婦女子に對して結婚の話をするに多少禪る所がないでもないが、併し結婚は人生の大儀で決して婦人だからとて度外に置く可きことでない。且又人は男女の別に拘はらず何れも皆結婚によりて始めて其人格を完ふることが出来るので獨身生活が完全なる人生の理想や典型を現實す可き筈のものでは決してないのであるから。吾人が茲に斯様な議論をしたからとて強ちに咎められる憂もなからうかと思ふ。畢竟するに結婚は神聖なもので而も偉大な精神的目的を有するものと云はなければならぬ。何故なれば元來人間と云ふものは社會的生活をしなければ満足出来ない筈の者で假令一時は何かの刺戟で各人個別の生活をする様な事があつても暫くの中には自然と相寄り相集つて群をなし部落を作ると云ふことになるに極つて居る

のみならず異性の男女は必ず合體して一對の夫婦となり之が一つの完全な人格を形くつて夫は妻を扶助し妻は夫を扶け補ふと云ふ様になつて茲に満足なる人間の社會生活と云ふものが出来る様になるのである。是が人間の間たる所で即ち人生の本務であつて決して恥ぢたり嫌つたりす可き筈のものではないのである。然るに世には殊更に是を避けて以て獨居孤立の生活をして男は妻なるものゝ爲めに系累を生じたり首かせを得たりすることを嫌ふものがあつる。女子にしても徒らに男子の願使に甘んぜんやと自ら獨立渡世の用意して却つて男子をして職業上の競争に敗れ取らしむる輩が、今日では中々に尠からぬ様になつて來た勿論女子が昔日の卑屈なる境遇を脱して漸次優勝なる位置に進みつゝあるは誠に慶賀す可きものではあるが之と共に徒らに時代の風潮に驅られて人生の大眼目なる此結婚期を失するものを生ずること漸く多きを加へ様とするものがあつるには誠に慨

嘆に堪えぬ次第だと思ふ。吾輩は繰り返して云ふが結婚は人生の目的を遂行するに最も必要な出發點であつて人生の眞意義は是より始まり是より起るのである。尙ほ言ひ變へたら是より以後が即ち人生とか生活とか云ふべき筈のもので是より以前は單に其準備の時代に過ぎないのである。結婚は斯の様に重大な意味を持って居るものであるから其結婚の儀式と云ふものは、東西を問はず昔から頗る嚴重で頗る窮屈なものであつたのである。何故又そんなに窮屈に嚴重にしたものであるかと云へば之を人性の欲するが儘に放任したならば種々の弊害や争鬭や罪惡が續々出て來て仕方がないからである。

以上述べた様に結婚なるものが神聖であり道德的なるものであるとしたならば、然らば其時期は何時が最も適當であらうかは次の問題であらう。故福澤先生は嘗つて其福翁百話の中に早婚必ずしも弊なしなど云はれて女子は十四五歳でも結婚し

てよいかの様に云はれたが併し今日では是は到底用ゆ可きことではあるまいと思ふ。我民法でも今日では男十七歳女子は満十五歳以上と云ふ明文がある位だから是より以前には勿論不可であると言はねばならぬ。是は議論する必要はなからう。然らば次に民法規定の通り女子は十五歳に達したら最早差支なきかと云ふに是も考へものだらうと思ふ。何となれば法律は止むを得ない最低限を示したので決して是れで充分と認めただのではないのである。考へても見たまへ満十五歳と云へば數へ年の十六七である。十六七のまな娘に迎も碌な家庭を形くることが出来る筈のものでない。高等女學校の課程さへもまだ了らない年輩ではないか。然らば高等女學校を終つた頃即ち十八九歳の頃は何うであるかと云ふに吾人は是でもまだくせくには及ばないと思ふ。一體家庭と云ふものはそう無造作に經營できるものではない。男女が同居して居るからとて直に家庭で候とは云へないの

である。家庭には特殊の目的あり統一あり秩序を有するばかりでなく之を主宰するものに對してはあらゆる方面の智識と見識と技能とを要するものである。是を思はないで唯もを早く丸髪にでも結つて見たいなど、思つたら飛んでもない間違である。

早い語が、苟も一家を形づくると云ふ以上は第一に經濟上に於て世と奮闘しなければならぬ。是が中々刺腕を要するので決して有るものは遣へ要るものは買へと云ふ譯には逆も行かないものである。恐れ多いことだが上御一人でさへ承る所に依ればいろく御儉約があると云ふ位だもの況して一般の生活には足らぬがあたり前の事である。金持は金持だけに金が要らうし華族さんは華族さん丈に金が要らう決して困るものはないだらうと思ふ。勿論吾々貧乏人は論外で話にも何もならないが併し道理は同じ事ではなからうか。實際家庭の苦樂の半ば、決して金の多少に

らずして家事經濟の方針如何にありと云ふことが出来る。換言したれば主婦其人の意志如何にありと云ふべきものである。此の如き見識は生若い婦人には少し六ヶ敷ものであらう。尤も忠實な三太夫の居る家は別物であるが。次には實際の家庭經營であるが之を精神的慰安的に平和なるホームタらしめんには夫々多方面に注意し熟練なる鹽梅を試みる必要があるが之も女學校出立の書生さんには少々骨が折れ過ぎるだらうと思ふ。最後に之を育児の方面から統計を調べて見るのに幼児の最も健康に生ひ立つのは重に廿歳以上廿八歳迄女子の産する所であるのを見ると女子の最も充分なる婚期は廿歳より廿五六歳迄の間にありと云ふことが出来ると思ふ。即ち女子は此時期に於て良縁を求めて歸する所がなければならぬものである。要するに吾人は生理上よりも精神上よりも將又家庭經營上よりも二十歳頃より婚期の始まるものなることを主張せんと欲するのである。